

朝日新聞



絵鳩毅さん(左)とシ
ャーウィン裕子さん



駒井修さん

伝える義務 我にあり

10月初め、神奈川県藤沢市の喫茶店で、英国から来日したシャーウィン裕子(74)は、97歳の元陸軍軍曹、絵鳩毅と向き合った。絵鳩は戦後6年間を中国・

撫順の戦犯管理所で過ごし、帰国後は中国帰還者連絡会の会員として証言活動をしてきた。1945年6月、絵鳩は山東省の村で、初年兵30人の訓練に

あたった。生きた捕虜を標的にする刺突訓練だ。中国人捕虜4人が部隊に割り当てられた。

「私はただの農民です。殺さないで下さい」

捕虜は口々に言った。なかに1人、15、16歳の少年がいた。

「家族は母親だけです。私の帰りを待っています」

少年は絵鳩の足にすがりつき泣いて訴えた。絵鳩は心が痛んだ。しかし……

4人は柱に縛られた。絵鳩は、4列縦隊の先頭4人に「出発!」と号令をかけた。

兵たちが匍匐前進で捕虜に近づく。絵鳩の上官の「突っ込め!」の号令で兵は短剣を抜き、半狂乱となって突進した。

「恐ろしい光景でした。上官の命令だと言いつつも、捕虜からみれば僕は命令者です。過ちを繰り返さぬため、自分の犯した罪を語り続けるのは、戦場

から帰った者の義務です」

シャーウィンは2時間以上にわたって絵鳩の話に耳を傾けた。9月下旬から2週間余りの日本滞在中、元特攻隊員ら16人に話を聞いた。

「欧米人は、日本人が一人ひとりで違ふことがよくわかっていません。日本にも戦争で苦しんだ人がいることを本に書いて、欧米に伝えたいのです」

シャーウィンは名古屋出身。東京女子大を卒業後、60年に渡米、ハーバード大などで文学、歴史学を学んだ。米国で結婚。91年にスイスに移り、99年から英国南部バース近郊に住む。

「英国に来て、日本人に対する人々の態度が、どこか冷ややかなことに気づきました」

その背景に、戦中、日本軍の捕虜となった6万人近くの英兵が、激しい虐待を受け、ときに死に追いやられた歴史の記憶があった。元捕虜の父をもつ近所の家族と知り合ってわかった。その後、シャーウィンは英国

各地に元捕虜を訪ね歩く。その1人に、エリック・ロマックス(91)がいた。

42、43年、日本軍はタイとビルマ(現ミャンマー)を結ぶ泰緬鉄道を建設した。過酷な労働、栄養失調、病気などで連合軍捕虜と、アジア各地から動員された労働者が多数死亡した。

タイ西部の現場で働いたロマックスは、同僚がラジオを作るのを手伝ったことなどが発覚、日本軍から拷問を受けた。仲間2人が殴られて死んだ。

そのロマックスに会うため、盛岡市に住む駒井修(73)が英国を訪れたのは2007年6月だった。駒井の父光男は1943年、陸軍少尉としてタイに渡り、捕虜収容所の副所長を務めた。

戦後46年3月、駒井は母に部屋と呼ばれた。自分と姉を前に、母の兄が何事か告げようとしたとき、「やめて!」と母が泣きながら止めた。

父が戦犯として処刑されたことは高校卒業後、教師に教えら

れた。しかし、父が何をされたかは分からなかった。父の戦友会に何度か出た。

「みなさんは、知っていることを私に教える義務があるのではないですか」

戦友たちは黙った。99年、英国の戦犯裁判資料を目にした。父がロマックスらを虐待して重傷を負わせ、捕虜2人を殴り殺したと判決にあった。

謝罪に訪れた駒井に向かってロマックスが語った。「私は裁判であなただの父親を指して『こいつにやられた、死刑にしろ』と言ったんだ。その息子がわびに来るなんて……」

ロマックスも苦しんでいたことを駒井は知った。「父に代わって心から謝罪いたします」

駒井の言葉をロマックスは黙って受けとめた。やがて緊張が和らぎ、ロマックスが言った。「ホテルにもう1泊、していいかないか」(上丸洋一) ※明日も掲載の予定です。